歴史地名の国語語彙論的研究

A Study of historical place-names as a Japanese vocabulary

堀　勝博
(Katsuhiro　HORI)

柳田国男がつとに指摘したように、日本は、狭小な国土ながら、地名の多さでは世界に類を見ない。それらはすでに意味や由縁が分からなくなったものが少なくないが、その中の一つでも何らかの来歴や意味をたどることができたとすれば、歴史、地理、文学その他さまざまの分野に関連する、思わぬ新発見につながるかもしれず、そこにこそ地名研究の意義があると考える。

本研究は、古代から今に伝わるいわゆる歴史地名について、国語語彙論の立場から、検討・考察を試みたものである。地名を国語語彙としてとらえ、漢字表記や語構成を中心として、国語学的分析を行うところに本研究の特色がある。

この２年間に、報告者が発表・脱稿した論文は、以下２点である。

①セミナー　万葉の歌人と作品　第９巻「大伴家持２」所収
　　ｐ．１～１５「橘の歌」　（和泉書院　平成１５年７月刊）

②セミナー　万葉の歌人と作品　第１２巻「万葉秀歌選」所収
　　「巻８－１４１９、巻１７－３９１５」　（和泉書院　近刊）

これらはいずれも依頼原稿であり、本研究の成果として発表したものではないが、地名に関連しては、②において「岩瀬」「野づかさ」に少しく論究している。

本研究の成果として、今年度中に発表予定の論文は、

③「片岡、片山、交野について」（大阪産業大学論集 人文科学編 115 掲載予定）

である。その概要を以下に記し、研究報告とする。

しなてる片岡山に　飯に飢て臥せる　その旅人あはれ　　親なしに汝生りけめや
刺竹の君はやなき　飯に飢て臥せる　その旅人あはれ

（推古紀―二十一年十二月）

陳防人悲別之情歌
わがかどの可多夜麻つばきまことなれわが手ふれなな土に落ちむかも
　右一首荏原郡上丁物部廣足　　（巻二十―四四一八）

庚子、車駕幸交野。　　（光仁続紀―寶龜二年二月）

など、古くから存した地名「片岡」「片山」「交野」は、いずれも「かたー」という連体詞を冠する点で共通するのであるが、それらがどのような地勢・地形を表すものであるのかについては、諸説あってつまびらかでない。本研究では、従来の解釈が不備であったことを明らかにするとともに、「かたー」をどのような意味に解すべきかについて、上代国語文献の諸例の検討によって明らかにした。また、「かたの」が何故に「交野」と表記されたかについても考察した。

万葉集など古代文献に出てくる地名には、その位置はおろか、よみ方すら明らかでないものもあり、今後ともこの方面での研究を進めていきたい。